

日本史B

【解答】

問 1	問 2	問 3	問 4	問 5
c	a	a	d	d
問 6	問 7	問 8	問 9	問 10
c	b	d	a	b
問 11	問 12	問 13	問 14	問 15
b	d	a	d	b
問 16	問 17	問 18	問 19	問 20
a	b	c	c	a
問 21	後鳥羽上皇は隠岐に流され、仲恭天皇は退位して後堀河天皇が即位した。上皇方の武士の所領は全て幕府に没収された。これらの所領に功績のあった幕府方の御家人が新たに地頭に任命され、さらに朝廷の監視と西国の御家人の統制のために京都に六波羅探題が置かれることになった。(127 文字)			
問 22	満 25 歳以上の男性に衆議院議員選挙の選挙権が、満 30 歳以上の男性に被選挙権が与えられ、納税額による選挙権の制限が撤廃された。しかし、女性の参政権は認められず、普通選挙実施による社会主義運動の活発化を取り締まることを目的に治安維持法を同時に成立させた。(123 文字)			

【学習アドバイス】

本学の入試は、4科目の選択科目の中から2科目を選択して受験する形式を採り、試験時間は2科目合わせて100分となっている。各科目にかける時間配分は、出題の分量にもよるが、1科目につき50分前後の時間を解答時間として考えるべきであろう。

2022年度の問題は、「7世紀から9世紀までの政治・外交」から、「明治期の外交政策」までが出題され、古代・中世・近世・近代とバランスのとれた出題内容となっている(2021年度は「9世紀末から始まる地方政治の混乱」から「満州国」まで)。分野では政治史を中心に、外交史・文化史・テーマ史で構成されている。

2022年度の入試は、従来は大問3題だったものが大問5題へと増加したほか、設問形式も語句・人名の空欄補充形式(選択・記述併用)と論述問題のほかに、文章による正誤判定問題と年代配列問題が新たにみられるなど、選択出題形式に大きな変化がみられた。同時に総解答数も従来の「12個・論述2題」から「20個・論述2題」と大幅に増加した(空欄補充形式は12から4に大幅に減少)。

本学を目指す受験生は、全時代の学習が必要不可欠となる。政治史中心の出題になっているが、政治史に偏ることなく、政治史と関連させて外交史・文化史・テーマ史・社会経済史の学習が大切になってくる。

出題形式の定番である空欄補充問題は、高校の教科書・用語集の範囲内の標準的なものとなっているので、一問一答集などを利用してスムーズに語句・人名等が選べるようにしておこう。

新たに出題された正誤判定問題に対しては、選択肢の各文をしっかりと読んで、誤った語句(人物・事項など)が入っていないか、各時代や政策に関するキーワードが入っているかいないかを正確に判断できるかが大切である。普段の学習から「〇〇に関わった人物は誰か」「〇〇の結果や影響はどうだったか」などを意識して学習を進めていこう。そして最後に正誤判定問題・旧センター試験対策用の問題集に積極的にトライして、「正しい箇所はどれか」「どこが誤っているか」に注意しながら進めていくとよい。

従来には出題されなかった年代配列の出題形式であるが、この形式は「知っている年代(年号)を基準に前後を特定する」「何世紀の前半・中頃・後半か」「何時代か」「為政者が誰の時か」などを特定することで正解が導ける。また年代配列の学習は、正誤判定問題にも関連・直結しているため、問題集を利用してさらに実力を磨いていこう。

本学では、120字程度の論述問題が2題出題されており、論述問題の成否が合否を大きく左右する。2022年度は「承久の乱後の動向」と「普通選挙法」が出題されている(2021年度は、「御成敗式目の内容」と「天保の改革における上知令の内容ともたらした結果」)。本学の論述問題は、主に「事項に関する内容・結果」についての論述であるため、吸収した知識を「誰が」「いつ」「どこで」「何をしたか(なぜそうしたか)」「どのような結果になったか」「どのような影響を与えたか」という形にならぬとよい。受験の基本となる教科書は、そのような流れで記述されているので、太字以外にも注意して、熟読することが大切だ。そしてその内容を自分なりにまとめてみるとよいだろう。論述問題は一朝一夕での対応は難しいので、早めの着手が望ましい。論述問題のトレーニングとして、高校(または塾・予備校)の先生に基本的なレベルの用語の課題を出してもらい、添削指導をしてもらうのが最も効果的な論述対策である。最初は少なめの字数から始めて、徐々に120字まで字数を増やしていくといいだろう。それを繰り返すことにより、論述問題に対する不安が大きな自信へと変わり、合格へ大きく近づくことになる。

以上のような対策を着実に積んでいけば、必ずや良い結果が出るであろう。